離婚したときに経済力がないっていうことにすごく不安感があるわけですし、・・（中略）・・大変だったから、もう二度と仕事は辞めないっていうふうに堅いポリシーを持ってたはずだったんです。

これまで、ひとり親家族の稼得役割を担って、あるいは職業人として仕事をしてきたことから培われていた自信を失い、新しく親役割・主婦役割を受け入れることによる不安を抱えている妻が少なくない。

（2）役割分業と家計

多くの日本の家族と同様、ステップファミリーでも、家事・育児のほとんどは妻が行っている。そして、家族人数が増える、子どもが増える、環境が変わる、夫の親が家族として加わる場合も少なくない。結婚前に比べて、妻の家事負担が明らかに増加している。同様に、家族人数が増える、子供が増えることから家計の負担も重くなる。日本において家計管理、特に消費の管理を行うのは妻の役割であるから、家計の切迫した状況に迫られるのも妻である。子ども４人と夫婦の６人暮らしをしている30代の実継母（#30）は、以下のように語っている。

専業主婦（になったらどうかと）…（夫が）「いいよ、そんなに働かなくて。６人家族の主婦をするのも大変なんだから」っていうことで、派遣の方の仕事も辞めて、６月いっぱいでやめて７月の頭から一緒に暮らし始めて。なんですが、やっぱり６人っていうのはすごくお金もかかるし、…（中略）…行っていきなり夏休みになって四六時中４人の子どもの世話をしてっていうのが割となんか息が詰まりそうっていうか。…（中略）…自分を含めて５人分のお昼だから、毎日毎日いろんなものを出さなきゃいけなくって、いろいろ作ると当然嫌いなものも多くって「やだ、こんなの」とかって。

子どもを互いに伴っての再婚は、平均子ども数よりも多くなりがちである。いわゆる「標準家族」の２倍の教育費がかかるであろうし、不況下にある現在でも子どもひとりあたりの教育費はほとんど低下していない。子ども数が突然増えることは、家計に大きく影響する。

４．思いがけない生活

こうして、いざ結婚生活が始まると、初婚の者や子を持たない者は、結婚生活の初心者、親としての初心者としてみなされる。継母や継父が子どもに関わろうとしても、未熟なものとしての他者からの烙印と、自分自身に自信がないことが加わり、養育者として不安定な位置に置かれる。結婚前は、いい父親に、いい母親にと思っていたのに対し、思いがけない状況が待っていたことになる。

一方、実母は結婚前の「申し訳ない」という感情をそのまま引きずり、実父はその感情に加えて、子育てに口を出しすぎてパートナーを管理することへのためらいが生じる場合もある。逆に、実父が子育てに手を出さずに口だけ出すことが、継母を管理してしまう場

合もある。

再婚どうしであっても、父親と母親ではなく、継親と実親という「違う立場」にたたされることも少なくない。「普通なら、夫婦は家族の中で同じ立場なのに」、ステップファミリーでは同じではないから、一緒に夫婦で問題解決をできないと考えるものもいる。

生活上の変化が一度に起きることも、ステップファミリーの特徴である。具体的には、夫婦生活・夫婦関係の確立、親役割の取得、子の成長に伴う親子関係の調整・夫婦関係の調整など、初婚カップルが10年かけて対処している事柄に、ステップファミリーは一時期に対処を迫られる。このような生活の変化を予測していたにせよ、様々な問題に対して対処する時間的余裕がないことが、問題解決を困難なものとしている。

ステップファミリーは結婚前の想定とは大きく違った状況におかれ、問題への対処に次々と迫られるため、親子関係の問題と夫婦関係の問題のどちらかのみ優先させて解決していこうとするカップルが多い。しかし、家庭内の問題を夫婦で解決していく中で、夫婦関係を構築していくカップルもいる。概して言えることは、結婚生活にはいるまでに時間をかけて二人が一緒に問題に向き合ったことが、結婚後の夫婦関係の構築を可能にしているようである。プレステップの時期も含めた時間の過ごし方が重要であるといえるだろう。

（永井暁子）

第５章　ステップファミリーのサポート・ネットワーク

１．はじめに

ステップファミリーのサポート・ネットワークの現状を分析する。ステップファミリーは子育てなどに関してステップファミリー固有の悩みを多く抱えている。パートナー同士でその悩みや問題などについて密にコミュニケーションをとり、助け合いながら暮らしているが、パートナーに相談するだけでは悩みを解決できないこともある。そうしたときに、彼女らが頼りにしているネットワークはどのような人であるかということを明らかにする。

結論を言うと、ステップファミリーにとって、パートナー以外の相談相手は驚くほど少ない。ステップファミリーにとって自分の重要な悩みごとを相談できる人を持つということは簡単なことではない。なぜステップファミリーであることが、サポート・ネットワークの拡大を阻む要因になっているのか、その理由を探っていきたい。

以下では、親、近隣の人といったカテゴリー別に、それらの人がステップファミリーにとってどのような相談相手になっているかあるいはなれないかということを整理していく。インタビューの対象者は母親（継母、実母）が多いのに対して、父親（継父、実父）は少ないため、分析は母親を中心に行い、最後に父親の母親との違いを示す。

２．相談相手になりにくい親

対象者の中には、親に心配をかけまいとしてあるいは親がステップファミリーとなることに対して反対したからという理由から、実継母が子育てで悩んでも親に相談しにくくなっているというケースがみられた。ステップファミリーとしての生活に悩みを抱えている者にとって、大きなサポーターとなりうる親に頼れないのは辛いことである。中でも親が結婚に反対してその後も理解が得られない場合はそうである。なお、夫方の親や前妻の親もいるが、これらの人には悩みのサポート相手になってもらいづらいようである。

#53　実継母（30代）

（継子に愛情を持てないということを夫に）ずっと話せないでいたんです。（中略）それで身近な人で妹にいろいろ話はしていたんですが、でも立場が違いますし、ただ聞いてはくれるというだけで、結果が見えなくて。（中略）母は話をすると余計な心配までして自分も悩んでしまうので、母には全然そういうそぶりは見せないんです。

#50　実継母（40代）

父が亡くなっているので母と弟なんですが、弟は「自分の人生だから好きにすれば」という感じだったんですが、母はすごく反対して、いまだに。（中略）振り切って出てきたので、親にも友達にも相談できないし、ちょっと辛かったです。その時はなんとかなるかと思っていたので。最近は本当に大変だなと思っています。

３．近隣との張りつめた緊張感と疎外感

継母／実母と地域との関係は疎遠である。その関係は単なる疎遠というだけでなく、周囲から自分が監視されているように感じたり、周囲に偏見をもたれていることにより、自

分だけ地域の中で違う存在として疎外感さえ持っている人もいる。ステップファミリーにとって近隣の人は相談にのってもらうといったサポート・ネットワークとはなりにくく、むしろ関係に緊張感や疎外感をもつ存在ーネガティブ・サポートの相手ーとなっている。それがやりにくいために、新たな場所に引越しした上で、周囲には自分が継母であることを伝えないようにしているという例（#62 継母 30 代）もみられた。

ただし、こうしたことが生じる背景には周囲の人や一般の人が抱いているステップファミリーに対する偏見やステップファミリーに対する好奇のまなざしといったものもあるが、それだけではない。ステップファミリー自身が「周囲の人はそう思っているに違いない」と考えて自ら近隣の人との関係を避けてしまっているということもあるようである。一種の＜ひきこもり＞といえなくもない。以下に関連するインタビュー結果を示す。

#17　継母（30 代）

継子と血がつながっていないことは最初から隠さなかったので、みんな知っていた。（中略）猫まで知ってるくらい伝わるのが早く、みんな知っていた。周りの人は自分のことを知っているのに、自分は誰も知らない。それがすごくやりにくかった。

#4　継母（20 代）

〔近所にはほとんど付き合ってる人はいない？〕何考えてるのかわからないとか言われてるみたいですけど。近所のおばさんとか言ってくるんです。だから余計閉じこもったりしてたんですけど。なるべく人と顔合わせないように走って車に乗って（笑）（中略）避けちゃだめなんですけど全部避けて通ってるんですよ。

4．広がらない交流 ── ステップファミリーでない友人とのつきあい

（1）ステップファミリーでない友人たちに相談することの限界

ステップファミリーではない友人との関係についてみると、ここでも、彼女らが相談相手にはあまりなっていない様子が浮かび上がってくる。彼らが相談にのってくれたとしても、ステップファミリーとしての悩みを解消することにあまりつながっていない。

#21　継母（30 代）

友だちのお母さんで私と同い年の人がおって、すごい気があって、その子には結構言うてるかな。（中略）そういう継子を持ったことはないからそういうところではわからへんけど、想像でしか言われへんっていうところが向こうにはあるから。

（2）新しい友人をつくるのが難しい ── ジェネレーション・ギャップと周囲の「目」

ステップファミリーが、ステップファミリー以外の立場の友人で悩みを相談できる人があまりいないことの背景には、ステップファミリーになってから友人ネットワークが広がりづらいという事情もある。友人ネットワークが広がりにくい理由としては次の 2 つがあげられる。ひとつは、結婚して突然大きくなった子どもの親になったあるいは自分の子どもよりも年長の子どもの親になったという継母の場合には、継子の同級生の母親たちは自分よりもはるかに年上であるため、母親同士の年齢差から友人とはなりにくいためである。

そしてもうひとつは、人から何を言われるかわからないという不安から、友人関係がつくりづらいということがあげられる。以下に関連するインタビュー結果を示す。

#17　継母（30代）
突然小学校三年生のお母さんになって、当時27才だったからそんなに若い人は他にいなかった。周りとのジェネレーション・ギャップがあった。他のお母さんたちとも交流がもてない。話しかけても会話にならない。

#27　継母（50代）
〔お友達が新しく増えているということもあるんですか〕う～ん、でも地元の方では…地元の近くでは（友達は）作れませんね。目の色が一つついているのがわかるんですよ。見方、見知らぬ人同士、私の背景を知らない人は普通の目の感じで見てくるんですよ。（中略）下手なことは言えないわけですよ。ちょっと愚痴なんか言おうものならどんな風に解釈されるかわからないでしょ。それの連続ですよね。

5．ステップファミリーとしての悩みはステップファミリーに

実母／継母たちは、ステップファミリーとしての悩みはステップファミリーにしたいと考えている。実母／継母たちが求めているサポートとは、単なる子育てなどの問題を＜相談＞できるだけではなく、自分の立場や苦しさを＜理解＞したり＜評価＞してもらうことのようである。さらに悩みを＜共有＞できる人を探してもいる。そこまでのことを期待できるのは、同じステップファミリーという境遇の人でしかない。だが、残念なことに現在のところステップファミリーの数は極めて少ないために、近所においてあるいは子どもを通じてというだけでは、同じ境遇の友人や仲間が周囲にみつかる確率は極めて低い。こうしたことが、ステップファミリーの母親たちの孤独感や疎外感に拍車をかけている。

#30　実継母（30代）
〔同じステップファミリーである人とそうでない人ではどんなところが違うか？〕自分で産んだ子を育てている友だちは「必ずわかってもらえるよ」とか、わかってお互い理解し合えて、映画のように「お母さん」って言って抱き合って泣くようなことが起こるのが正しい姿って像ができあがってるんですよね。（中略）やっぱり経験されてる方は「必ずしもそうならないこともあるんだよ」って。「でもそれはそれで、だから間違ってるとかじゃないんだよ」ってことで私は今すごく救われてるな。

6．サポート・ネットワークを広げる方法

継母／実母のサポート・ネットワークは広がりにくい傾向がある。だが、対象者の中には、そうした状況を打開して、ネットワークを広げていったケースもみられた。注目される方法としては、①PTA など継子の教育の場に出て行く、②仕事に出て職場のネットワークを広げる、③ステップファミリーの団体やインターネットを通じて同じ境遇の相談相手を見つけるなどがあげられる。前2者の例としては、次のような人がみられた。

#50　実継母（40代）

〔この1年でご近所の関係はどうですか？〕近所ではまだないです。（関係があるのは）PTAの方です。給食委員なので、1年生から6年生までの各クラス1人のお母さんがいるので、いろんな学年のお母さんの話も聞けるし、中学校にいっているお子さんを持っている方もいるので、今の中学校がどうなのかも聞けるし。

#62　継母（40代）

（職場に）同期で入った同じ主婦のパートの人はすごくみんなやさしく仲良くしてくださって、その人たちは全然みんな場所も違うので、全部あるがまま相談していたので、みんな相談に乗ってくれて、私が愚痴を言うほうで。それが救われたというか。

ステップファミリーの団体やインターネットのホームページを通じて、自分と同じステップファミリーの相談相手を見つけた例は数多くみられた。

#21　継母（30代）

あの、その○○○（継母たちの会）でね、ひとりずっともう1年くらいメールを続けてる人がいるんですよね。でも顔を知らないんですよ。（中略）でもね、その人には包み隠さず・・・誤解されることがないから、私のことを。だから下手に私のどんだけ仲いい友だちでも、環境が違うと誤解されるかもしれへんっていう恐怖あるでしょ？なんか。本心は言われへんし、自分の親に言ったら心配するだけやし。

7．少ない継父、実父のサポート・ネットワーク

継母／実母のサポート・ネットワークは少ないが、継父／実父のそれはさらに少ない、というよりも皆無に近い。この背景には、第一には、自ら家庭内の問題を進んで相談しようとはせず、できるだけ自分ひとりで解決しようとする傾向がある。第二には、子育ての悩みなどを相談しようにも、同じ男性同士で聞いてくれる人が周囲にいないということがあげられる。だが、いずれにせよ継父／実父のサポート・ネットワークが少ないことには変わりない。本人たちが相談相手を強く求めていない点で切実さはないが、第三者からみればサポート・ネットワークがなく孤立しているのはむしろ継父／実父であるといえる。

#51　実継父（30代）

〔愚痴を言うなど精神的に頼れる人とかは？〕ぼくは結構お気楽なんですよ。大変、大変とか言ってるんですけど。まあしょうがないか。（相談相手いない）

#41　実父（40代）

課題が子育てとかそういう話なので、男の人に言ってもわかってくれないんですよ。（中略）ちょうど一番上の子と同じ年齢の友達のお母さん方が、みなさん本当にいい人ばかりだったんです。頼んだらなんでもしてくれそうな感じだったんですけど、逆にあんまり甘えるのはどうかなという気がした。（中略）同性と異性、お母さん方と私が異性というのがあったのかもしれませんね。

7．まとめ

（1）サポート・ネットワークの種類とサポート内容

継母／実母のサポート・ネットワークの現状を、親、近隣関係、ステップファミリーでない友人、ステップファミリーの友人というカテゴリー別に分類すると表Ⅴ－1 のようになる。

表Ⅴ－1　継母／実母のサポート・ネットワークの種類別にみた受領するサポート内容とサポート・ネットワークとしての位置づけ

種類	親	近隣関係	友人(非ステップファミリー)	友人(ステップファミリー)
受領するサポート内容	重要な相談相手となりうる 親に心配をかけまいと、相談しないケースもある。また結婚に賛成していない場合は、サポートを受けられなくなる 夫方の親や前妻の親は悩みの相談相手になりづらい	多くの場合は関係疎遠 継子の親にとっては、むしろネガティブ・サポートとなることもある	子育てや家族関係などの相談相手 ただし、ステップファミリーでない友人との関係は拡大しにくい ステップファミリーとしての悩みは相談しづらく、立場が違うので完全な共感者とまではいかない	ステップファミリーとしての悩みの相談相手、共感者 ただし、周囲には見つからないことが多い
サポート・ネットワークの位置づけ	ポテンシャルはあるが活用できていない（できない）資源	ストレッサー	相談相手とはなるが、共感者とまではならない	なかなか見つからない共感者

（2）孤立しがちなステップファミリー

継母／実母がステップファミリーとしての悩みを相談できる相手は驚くほど少ない。重要な相談相手や理解者となりうるはずの自分の親に悩みを相談しづらく、ステップファミリーになってから近隣関係、友人関係のネットワークを広げづらい。さらに、ステップファミリーが孤立している最大の理由は、ステップファミリーとしての悩みはステップファミリーにしかわからないことあるいはわかってもらえないのではないかと当人たちが考えていることである。ステップファミリーである友人や仲間は、近隣や職場等の日常生活の範囲ではなかなかみつからない。多くの継母／実母たちが、悩みを内に秘めたまま、周囲

の誰にも悩みを打ち明けられず、打ち明けても共感してもらえずにいる。

（3）サポート・ネットワークを広げる方法

継母／実母のサポート・ネットワークは広がらず、脆弱になりがちである。だが、継子のPTAや職場など新しい世界に積極的に出て行くことが、そこでの友人関係を増やすことにつながった例もみられた。近年はステップファミリーの団体やインターネット上でステップファミリーのホームページもある。そうしたチャネルを通じて、同じステップファミリーという境遇の相談相手を見つけたという例もみられた。継母／実母はネットワーク構築のハンディがあるが、それを打開する有効な対処方法があることも発見された。

（4）実継母と実継父のネットワークの違い

実母と継母についてみると、先にあげたサポート・ネットワークの特徴は多かれ少なかれ両者に当てはまる。だが、社会的な孤立の程度は継子を抱えた場合（継母と実継母）の方が、実母よりも状況は深刻である。

サポート・ネットワークの違いは、実母と継母間よりも、母親（実母、継母）と父親（実父、継父）間の方が顕著である。父親の場合はサポート・ネットワークがほぼ皆無に近い。子育てなどで大きな困難を抱えやすいステップファミリーの父親にとって、いざ子育てのことや夫婦関係で悩んだときに誰も相談できる相手がいないというのは深刻な問題である。

（松田茂樹）

第６章　専門機関・専門職のステップファミリー支援の現状と課題

１．はじめに ── 研究の目的・方法

（１）調査の目的

本研究班では、これまで当事者であるステップファミリーの親へのアンケートおよびインタビュー調査を実施し、その実態や支援ニーズについて明らかにしてきた。その中で、ステップファミリーのかなりの親たちが、離婚、再婚、再婚後に、既存の専門相談機関に援助を求めて、相談している一方で、相談機関で十分な支援が得られず、ステップファミリーの悩みに専門に応えてくれる新たな相談やカウンセリングの場に対するニーズも高いことも明らかになった[1]。

本調査では、既存の児童家庭福祉に関する専門機関の専門職が、新しい家族形態であるステップファミリーに関して、実際にどのような相談を受けているかについて、その実態を明らかにすること、また専門職のステップファミリーなどの新たな家族形態や、離婚、再婚に伴う親子関係などに対する意識について明らかにすることを目的とした。

ステップファミリーにかかわる専門機関は、再婚以前の離婚問題や、ひとり親家庭にかんする相談を含めると、かなり広範な機関が含まれるが、今回の調査では、児童家庭相談を受ける公的機関（児童相談所、福祉事務所など）、および児童福祉施設（保育所、児童養護施設、乳児院など）のほか、離婚、再婚にかんする女性の相談窓口となっている女性センターなどをその対象とした。調査にあたって、ステップファミリーという未だ日本の専門機関では必ずしも認知されていない支援対象に対する意識調査であったため、調査協力をいくつかの機関に依頼し、協力が得られた機関の専門職などからの紹介で調査対象を広げていくという形で、調査協力者を募った。

（２）調査方法

調査対象者：今回のインタビュー調査では、対象地域を関東、関西圏の２ケ所とした。調査対象者は、全 13 名となり、その内訳は以下のとおりである。

①関東圏調査　（全７名）

児童相談所児童福祉司　４名（男性２名、女性２名、うち３名は係長職）

保育士　３名　（女性３名、民間保育所勤務１名、女性センター保育室勤務１名、乳児院勤務１名）

②関西圏調査（全６名）

女性センター職員　（女性２名、うち相談員１名、心理職１名）

福祉事務所家庭児童相談室　家庭相談員　（女性４名）

データの収集方法：

調査期間：2003 年７月～12 月

調査方法：２名または３名のインタビュアーによる半構造化インタビュー

調査時間：１回につき、１時間から２時間程度

---

[1] ソーシャル・サポートにおける CMC 研究グループ編『ステップファミリーにおけるソーシャル・サポートの研究』明治学院大学社会学部付属研究所　2002 年　pp. 109-115.

質問項目：①専門職としての経歴、現在の仕事の内容など、②ステップファミリーの支援経験について（離婚相談、ひとり親家庭、再婚問題も含めて）、③専門職としての「家族観」について（血縁観、子育て観、離婚・再婚観など）、④ステップファミリー観について（継親子関係、別居する血縁親子関係、養育費、面会権などについて）

なお、以下の結果分析にあたっては、調査対象者および支援家族事例のプライバシー保護のために、所属自治体名などの明示は控え、また年齢や履歴、かかわった事例などについても、インタビュー結果の意味内容を変えない範囲で変更している場合がある。

2．関東圏専門職調査の結果と考察

（1）児童相談所児童福祉司インタビューの結果

①対象者の特徴

今回、対象となった児童福祉司は、4名とも40～50歳代で、児童福祉事務所などの児童福祉領域の職歴が10年以上のベテランであった。同一児童相談所内で、調査協力を募った際、ステップファミリーへの相談実績がないなどという理由で、経験年数の比較的浅い児童福祉司の協力は得られなかった。公的機関の専門職にとって、ステップファミリーという用語自体、なじみのあるものではなく、実際のインタビュー場面においても、当初「ステップファミリーの支援経験はほとんどない」と言いながら、こちらからの問いかけで「そういえば・・」という形で支援体験が語られることも多く、一般に、公的相談機関の専門職が、ステップファミリーという家族形態の存在を明確に意識しつつ、支援にあっているわけでないことがうかがえた。

②ステップファミリーの支援経験について

4名とも、主に虐待などの問題ケースを契機に、ステップファミリーと出会っていた。児童相談所では、電話相談などの一般的な子育て相談では、特にステップファミリーであるかどうかは確認しないので、結果として児童相談所で取り扱うステップファミリーの事例は、かなり深刻な問題を抱えたステップファミリーに限定されてしまうということであった。回答者も、「児童相談所では、一般的なステップファミリーというより、深刻な問題を抱えた家族しかかかわっていないと思う」と応えており、自分たちが一般のステップファミリーの中で特に問題の大きい家族に関わっているという意識が強いことがうかがわれた。

具体的なステップファミリーの支援事例としてあげられたのは、特に支援が困難で印象として残っている虐待を含むケースが多かった。具体的には、「継父による虐待のケース（身体的、ネグレクト、性的虐待を含む）」「経済的理由により、再婚を繰り返す母子世帯のケース」、「親（継親含む）自体の虐待体験のあるケース」などであった。血縁以外の親子関係ということで、里親のケースをあげる場合もあったが、血縁のない子どもを育てるというところからスタートする里親と、新たな夫婦関係をつくるというところからスタートするステップファミリーのケースを、専門職として同じ視点で考えていくことが妥当なのかということについては、今後、検討する課題と思われる。

③支援の困難性、方針や工夫などについて

児童相談所でとりあつかうステップファミリーの事例は、虐待などの深刻な問題を抱え

ているケースが多いため、結果として、子どもを一時保護から施設入所させるという経過をたどることも多いということであった。長期にかかわらざるを得ない虐待ケースの場合、その過程で、親との面接が深まり、親自身の家族関係（親のステップファミリー体験など）まで話が深められ、支援が進められたケースもあったが、一般的にはそこまで踏み込むのが困難な場合が多い。深刻な問題を抱えたケースでは、継父の場合、問題があることを継父本人が自覚していない場合も多く、しつけの一環や父親としての権威を継子に示すなどという態度もみられるとのことであった。とくに最近では、継子と10歳未満の年齢差しかない比較的若い継父のケースなどで、暴力で子どもを支配するような傾向のある継父などもあり、対応に苦慮しているということであった。

母子世帯の場合では、経済的安定を第一に求めて再婚するケースなどの場合、実子に対する再婚の説明や、準備などの時間がもてず、子どもが納得しないまま再婚に至るケースや、次々とパートナーが代わるケースもある。継親とのトラブルで、子どもが施設入所中に、新たな家族形態に変わっている場合（新しいパートナーとの間に子どもが生まれる。苗字が変わっているなど）などもあり、子どもにとって過酷な状況もみられる。

支援方針については、４人とも「子どもの立場にたつ。子どものことをここでは一番考えて支援方針をたてる」と応えている一方、再婚家族の支援の工夫ということでは、個人によってかなり違った意見がみられた。具体的には「親子関係にとって、乳幼児期の愛着関係が重要と考えているので、それがない継親子関係（血縁でもそこが切れている親子）は難しいという意識をもって、食べること、排泄などの基本的な生活習慣の違いを１年間くらいかけて、ゆっくり受け入れていく度量を親にもってもらうよう助言する」「子どもにとって血縁関係などのルーツは非常に大事なので、実の親を否定しないように気をつけている」、「がんばりすぎている継母などに対しては、がんばらなくてもよいということを伝えている」、「がんばっているところを認める。尊重していく姿勢でかかわる」、「同じ兄弟でも、うまく新しい親との関係を結ぶ子もいれば、それが難しい子もいる。家族内での関係性に着目した支援が必要」などがあげられ、それぞれベテランとして、支援した具体的な事例を通して独自の支援方針や工夫があるものの、それらが同一職種内で確認、共有された支援方針にはなっていない状況であることがうかがえた。

④離婚、再婚、ステップファミリー観について

４名の児童福祉司のうち、１名の方は自らステップファミリー体験があり、また１名は、親が里親だったため、血縁のない親子、きょうだい関係を身近に体験した人であった。この２名は、自らの家族体験が、現在の専門職としての家族観に深く影響しているように思われた。とくにステップファミリー体験をもつ人からは、自分の体験として、親の再婚に際して、子どもとして、それを受け止めるための時間が与えられたのが大きかったので、家族が一緒になるための準備や意識がとても大事だと思うという意見も聞かれた。

またステップファミリーということで、欧米からの知識では分かれた実親も含めた「拡大家族」というイメージがあったが、実際に事例にかかわると現在の継親子関係だけで悩み、家族関係も形成されていることがほとんどで、日本の場合とても狭い家族関係という印象であり、知識と実際の姿の間でギャップがあったという意見も聞かれた。

離婚した実親との関係では、面会権、養育費については、「子どもがどう思うかという気持ちを大切にしたい」としながらも、「DVなどで離婚している人が多いので、子どもを

介して交流することはかなり難しい」、「虐待担当の立場からすると、誰でも実親に会えるという権利を保障することのリスクは大きい」、「共同親権は、ＤＶケースでは子どもの施設入所などが必要な際、親の同意を取り付ける際に大きなネックになる場合がある」、など現実には、実現の難しさを述べる人が多かった。

（２）保育士へのインタビュー結果

①対象者の特徴

今回の調査対象である保育士３名は、いずれもSAJの運営スタッフ（保育士）の紹介でインタビューに協力していただいた方であった。結果として３名とも、同僚や友人として身近な存在としてのステップファミリーにかかわっており、インタビューでも、そのことが、各自のステップファミリー観に影響を与えていることがうかがえた。対象となった保育士は、20代後半から30代の女性で、保育士としての職歴は７年から13年であった。各自の働いている保育現場は異なり、同一民間法人の認可保育所に10年以上勤務の人、児童養護施設を経て、現在乳児院勤務の人、結婚前に数年民間保育所勤務後退職、その後復職し、現在女性センター内託児所での勤務の人であった。

②ステップファミリーの支援経験について

一般保育所勤務の保育士は、これまでの 10 年以上の職歴のうち、ステップファミリーとして印象に残っているのは２ケースだけということであった。両方とも、父子世帯が再婚し新しく継母となったケースであった。１ケースは、連れ子と実子の双方が保育園に通園していたが特に問題は感じなかったが、別のケースは、子どもと継母との折り合いが悪く、保育園で子どもの情緒不安定から、虐待が発見されたケースであった。また一般保育所から女性センター勤務の保育士からは、より詳細なステップファミリーの事例があがった。母子世帯に新たに初婚の継父という形であったが、母親から「実子が継父になつかない」という相談を受け、具体的に親にアドバイスをしながら、保育士として長期にかかわったケースと、双方が子連れで再婚したステップファミリーで、それぞれ実子をかわいがり、継親子関係がうまくいっていない再婚ケースであった。また、乳児院勤務の保育士の場合は、離婚などの理由で預かるケースが多いが、再婚などによって引き取られた場合、ステップファミリーになったその後の状況は分からない状態がほとんどとのことであった。印象に残っているケースとしては、兄弟で乳児院に入所したケースで、二人の実父が違い、面会時に、現在の父親の子どもとしか親が面会しないケースで、その後子ども二人は、児童養護施設に移ったが、帰宅時に継父による虐待があったケースがあがった。ステップファミリーとして、特に意識的にはかかわっておらず、あまり問題も感じていない保育士がいる一方で、別な保育士は、母親からの相談をうけて、子どもの状況をみながら、必要に応じて深くステップファミリー（再婚前の付き合い時期も含めて）にかかわっている場合もあり、ステップファミリーについての意識にはかなり個人的な差があることがうかがえた。また、乳児院の保育士では、ステップファミリーの中でも、虐待などのかなり深刻な問題を抱えたケースにかかわっているが、家族そのものには現状ではほとんどかかわりがもてない状況が述べられた。

③支援の困難性、方針や工夫など

一般保育所の保育士では、とくに意識した関わり方はしていないというものの、ひとり

親世帯の数がかなり多くなってきているので、父の日、母の日のイベントをあえて大きくやらないなどの配慮をするようになっているとのことであった。また離婚、再婚に際して、親から苗字を変えるタイミングなどについての相談を受けたり、途中で名前が変わる予定なので、下の名前を持ち物に書いてほしいという要望を受けることもあるが、そのことで子どもたちの間でイジメなどの問題が起きたことはないとのことであった。

また別の保育士は、子どもが新しい父親になつかないと相談をうけた事例に対して、「お母さんはいろいろ考えて再婚を決めたのだから、そのことに関しては自信を持っていいと思う。お子さんについては、今一番してあげられるのはお母さんを求めているわけだから、新しい継父に無理矢理なつかせようとしないで、まずは自分が一番関わってあげて、その子が安心して新しいお父さんにも目が向けられるような環境を作ってあげてください」というアドバイスを与えている。そして長い保育園でのかかわりのなかで、子どもと父親との関係が変化していった過程を、「あのときお父さんがしつこくしたり、慣れさせようと無理をせず、子どもとママと一緒の時間を随分作ってあげたみたいなんです。お父さんは慣れるまで長かったと言ってましたね」と振り返っている。また親が別居や離婚したときの子どもの状況について、「もめて苦しんでいる父母より、保育士は客観的に子どもだけを見ているので、ちょっとした変化に早く気づくことが多い」「DV などで逃げてきた母子世帯の子どもの場合など、他の子どもによられただけで、さっと手が出てしまう子もいる」という発言から、子どもを通して家族の状況を詳細に把握している姿がうかがえた。

④家族観（離婚、再婚、ステップファミリーについて）

3 名の保育士のうち、2 名はご自身の両親が離婚した体験を持つ人、また自分自身がステップファミリーという人であった。二人とも、自分自身の体験から、家族観について、「自分の両親の離婚ということがあって、どういうのが家族なんだろうと考えはじめて、形だけの家族なら家族でなくてもいいのかな？とか。そういう意味で、ステップファミリーも、たとえ血がつながらなくて、後から結婚した形であっても、信頼関係がもてて、家族としてつながっているなら、それも一つの家族なのかなという考えが以前より根付いてきた感じ」、「血がつながっている、いないにかかわらず、何人かがまとまって暮らしているんだから、それぞれが努力して作っていくものだと思う。家族であることに甘えるのではなく、お互いのいいところ、悪いところを認め合っていくものなんじゃないか」と答えている。

またステップファミリー（継子）体験のある保育士は、「ステップファミリーは必要以上に努力しないといけない一方で、一生懸命家族になろうとしすぎると苦しいのかなと思います。無理矢理、お母さんなのよと言われたら、子どもはツライかもしれませんよね。何年かかってもしょうがない。その子と親としてでなく人間としてどうやってうまくやっていくかと考えていった方が、子どもを一個人として認めていく方がうまくいくと思います」と答えている。

（3）関東圏インタビュー全体をとおしての知見

児童相談所児童福祉司インタビューからは、児相がステップファミリーの中でも、きわめて深刻なケースを支援している現状が明らかになった。特に虐待と深く結びついているケースとのかかわりが多く、経済的な問題、親の虐待体験など、多くの問題を重層的に抱

えた複雑なケースが多いことが報告され、その支援に苦慮している現状がうかがえた。一方で、電話相談など児相で実施されている一般の子育て支援では、特にステップファミリーであるかどうかを確認したり、意識してかかわってはおらず、結果として上記の深刻なケース以外で、児童相談所がステップファミリーの相談にどの程度応じているかは不明であった。また、子育てに悩みをかかえる親のグループ指導なども実施しているが、特に継親として区別せずに、一緒に支援しているとのことであった。以上から、児童相談所では、多くのステップファミリーがかかえる特有の親子関係の悩みなどにはダイレクトにはかかわっておらず、子育ての悩みなどの相談やグループ活動では、ステップファミリーは、血縁による家族と同じ支援を受けていることがわかった。このことは、個々の児童福祉司のインタビューでは、「親子関係にとって、乳幼児期の愛着関係が重要と考えているので、それがない継親子関係（血縁でもそこが切れている親子）は難しい」と考え、血縁による親子関係との違いを認識しつつ支援にあたっていることと矛盾する。ベテランの福祉司は、個々の体験から、ステップファミリーについて、それぞれ特有の視点をもってかかわっているが、そのことが児童相談所全体の支援方法にはなっていないということなのであろうか。

保育士の場合は、所属する機関、また個人差によって、ステップファミリーへの関わり方に違いがみられた。もっともステップファミリー特有の問題に意識的にかかわっている状況がうかがえたのは、女性センターの保育室に勤務する保育士であった。この保育士は、ご自身がステップファミリー体験を持っており、体験をとおして、より積極的にステップファミリー特有の親子関係にかかわることができているともいえる。一般に、保育士の場合は、子どもとのかかわりを通して、子どもの状況の変化から、家族状況の変化などを早い段階でつかむことができる可能性が示唆された。また、日常的に送迎場面で親ともかかわりがあり、長期的に家族にかかわる中で、継親子関係の問題に専門家としてサポートしていった事例もみられた。

一方、乳児院の保育士の場合は、児童相談所がかかわるケースと同様、かなり深刻なステップファミリー、もしくは将来的にステップファミリーになる可能性のある事例にかかわっているものの、子どもをとおして親の育児相談などにかかわる状況にはなっておらず、施設を出たあとのアフターケアもほとんど出来ていない状況のようであった。

児童相談所児童福祉司、保育士双方とも、今回の調査協力者の結果からは、本人自身の家族体験が離婚、再婚などを含めた専門職としての「家族観」に大きく影響することがうかがえた。特にステップファミリー体験をもつ専門職は、他の人と比較して、親の再婚時の子どもへの配慮（子どもへの説明や、準備期間の用意の必要性など）や、継親子関係形成について、実親との面会の必要性などの意見を、本人の体験を通じてかなり具体的かつ明確に持っているようであった。

今回の専門職インタビューをとおして、同じ職種であっても、個人によってステップファミリーにかかわる際の視点には、かなり大きな違いがあることが感じられた。児童相談所児童福祉司、保育士とも児童福祉の専門職ということで、「子どもを通して家族をみる」「子どもの基盤（実親関係）を尊重する」という姿勢は共通して持っていたが、ステップファミリー特有の問題についてのかかわり方はそれぞれの専門職で、これまでの経験や自らの家族体験などにより、それぞれ違ったアプローチをしていることがわかった。「継親

の場合、がんばりすぎないように支援する」という人や、「がんばっているところを指摘し、自信をもたせる」という人、「子どもには継親に無理になつかせようとしないで、まず実親は子どもが安心できる環境を整え、ゆっくり継親との関係をつくっていくことが大事」「食事、排泄などの生活習慣の違いからこじれていくケースが多いので、その違いを大人が時間をかけて受け入れていけるように支援していく」といった具体的な支援方法をとっている人などがいる。しかしこういった個々の専門職のステップファミリーへの特有の支援の視点は、現状では機関や他の同一職種の支援方針として確認され、共通のものとはなっていないように思われた。（茨木尚子）

3．関西圏専門職調査の結果と考察

（1）調査対象者の特徴

関西圏内の公的相談機関（家庭児童相談室、および女性センター）おいて、相談員6名に前述のチェクリストをもとにインタビューを実施した。相談員は、全て女性であり、経験年数は10年以上1名で、残り5名は全て20年以上のベテランであった。また、経歴としては、臨床心理士のほか、前歴として、児童相談所職員、学校教諭、保育士など多様であった。

家庭児童相談室の場合、相談者の居住域が限定されており、相談員自身「この地域は～～な人が多い」「昔からこのあたりは～～と呼ばれていて」等、「地域色」を重視しているように見受けられた。「ステップファミリー」という言葉には馴染みがなく、再婚に関して「特に意識したことはない」という発言が多く、必ずしも、個別面談の中で家族構成、形態を聞くとは限らない中で相談業務が行われているようである。家庭児童相談室の場合、相談経路としては保健センターでの定期検診を通じて子どもの養育不良からあがってくるものと、子どもの不登校といった問題行動などから直接母親が相談してくるものとが主である。女性センターも含めて、相談者である母親の子育てに対する意識も変化してきているように感じているとの発言も多く聞かれ、近年は離婚やDVについての相談も増加しているようである。

（2）インタビュー結果

直接的に継親子関係についての相談ではなく、家族内の他の子ども（主に、現在の夫婦間の実子）が対象となっている相談の面接から、後にその家族がステップファミリーだとわかった事例について、何件か聞くことができた。これらのケースでは、夫による妻への暴力が主たる問題となっており、専門職として、これまでステップファミリー特有の対応したことはないと認識しているようである。面接の初期段階で、ステップファミリーだと自分から話す人はほとんどないということであったが、例外的に最初からステップファミリーだと話した家族は、継子が独立した後に再婚というケースであった。

また、ステップファミリーの相談を受けたことはないが、相談者である母親自身が継子として、ステップファミリー体験があり、「子どもの育て方がわからない。自信がない」と相談にくるといったケースがいくつかあげられた。事例をとおして、ステップファミリーで育った継子に対し、「今まさに育っているという期間には所謂『いいこ』として成長しがちで、自分が子育てをする段階になったときに自分の築いてきた親子関係、親への甘

え方や他の家族との比較などの中で葛藤が起こりやすいのかもしれない」という印象を持っている専門職もいた。

ステップファミリーの相談に対して、実際にどのように対応したかについては、ある相談員は「子どもを連れて母親が再婚したステップファミリーの継父子関係が良くないという相談がこれまでいくつかあったが、その際には、『子どもが再婚当時3歳ぐらいになっているため、前の父親の記憶もあるのと、母親をとられたような気持ちを持っていることもあって、子どもが継父になつかないことがあるが、それは成長として人をちゃんと区別できている、その子が正常に成長している証拠。父親の愛情は、父親が一生懸命関わってくれていれば、子どもはこの人に頼っていて安心なんだということが徐々に理解できてきて、何かをしてなつかせないといけないということではなくて、毎日の生活の中で親子関係ができてくるから焦らなくていいですよ。今のままで、いろいろ一緒に遊んだり、なかなか返事しないかもわからないけれど声をかけてやったりしてください』と言ってきた」と話した。継親が悩むのも、継子どもとうまくいかないのは当然であるが、生活の過程で、継親子関係の繋がりを築いていくことはできると考えているようであった。

また継親子関係ということでは、専門職としては、里親と養子との親子関係の方が身近に感じるということで、里親による相談（初めて里子を家に迎える際の心構え、里子の施設入所を希望する場合、里親による子育て放棄など）をステップファミリーの支援経験として挙げる人も多かった。

全体的に養育費や面会権に関する相談はあまりないという答えであった。別れた実親との面会に関しても考えは様々であった。ある相談員は、「離れて暮らす実親、祖父母との面会を続けている子どもがいたが、関係が不安定だからか、子どもが虚像と実像とがわからなくなっているような印象を受けた。昔は離婚したら全て関係を絶っていたのが、現在は大人の考えで面会を促すこともあり、実際は難しいと考えている」と述べ、面会否認の立場に見受けられた。

一方である相談員は「子どもは成長過程で自分の実の両親はどんな人だったのかと必ず思う時期がある。手放した親は、それで子どもとの縁が切れてしまうのではなく、絶対子どもが訪ねてくるということを常に頭に置いて欲しい。いつ子どもが会いにきてもいいように子どもを傷つけないちゃんとした人間になってくださいと言ってきた。新しい家庭で安定して愛情深く育てられていても自分の親に会いたい気持ちが出てきて、それをしないとこの先自分の人生がないというぐらい思いつめることもある。だから、子どもを連れて再婚した親は子どもの会いたい気持ちが新しい親に申し訳ない、と思わないように言っておかないといけないと思う。親子の面会を継続していくには関わる人の協力が不可欠だが、子どもにとって良いことだと思う」と面会を勧める立場であった。

また、支援の実態として、家庭児童相談室相談員は、措置権がないことや児相とは連携はとりながらも扱うケースは随分違うということ、深刻な虐待が疑われる場合にはすぐに児童相談所へ連絡する等、児童相談所との違いを述べていた。

10年以上の児童家庭相談をしてきた経験から、「昔と比較して、母親の主張が変わったように思う。子どもとじっくり向き合って楽しむという経験がないままに、早く分離したい、独り立ちしてほしい、私は〜〜したい、という母親が増えている」との発言も複数あった。ただ、子育て環境は年を追うごとに益々困難な状況にあり、子どもが育ちにくい、

子どもを育てる家庭が揺らいできているという認識は共通していた。

（3）相談専門職の家族、家族支援に対する意識

一般に、夫婦関係が良くないこと、不仲が子どもに与える影響についての相談が多いようである。子どもの発育に関する件で相談に繋がり継続して来ていた中で、子どもの様子が変化してきた（他の子どもにおもちゃを取られたのにスッと知らない顔をする、部屋の隅でひとりで遊ぶ、他の子ども同士が喧嘩しているときに叫ぶなど）のをきっかけに親に尋ねてみると、離婚していたということもあり、大人に対して過剰に警戒的な態度をとるなど子どもへの影響は大きいと考えている。

また、相談を受ける側として、「似たケースが以前あった」と考えてパターン化してしまいがちになるため、「できるだけ客観的にその家族を見て、接する家族は個々それぞれのケースで問題も人間も違っているということを忘れず、自分の個人的な過去の経験や相談経験の中で考えてしまわないように気をつけている」、「新しい気持ちで勉強しながら一つ一つケースに当たらないと、問題の本質を見損ねてしまう可能性があると思って取り組んでいる」、「家族とは一言では言えなくて、家族の数だけその状況は違っているといつも思っている」というような発言がみられた。家族に対する固定観念を持たないよう努めつつ、その相談者の気持ちを正確に把握することの大切さを意識していることがいくつかの発言にみられた。そして、「子どもに起こる問題を以前はその問題自身だけを見てきたところがあったが、今は、子どもの家族、環境があって、問題が起きていると考えるようになった」という相談業務を通しての視点の変化も聞くことができた。

（4）関西圏インタビュー調査全体を通しての知見

ある専門職は、ステップファミリーについて「ステップファミリーは、それぞれの喪失というか、別れ、何らかの傷つきを前の家族の中で体験しているかもしれない。これから家庭をつくる、建設していくという大きな作業の部分と、それぞれが抱えてきた傷つきや喪失というようなことを整理していくというか、そこを大事にしていくことが必要なのではと思う。もちろんそのまま現状でいけるようであれば、いろいろ掘り起こす必要はないが、現在何かつまずきがあって今のことを考えるのにそこを見なおす必要がある場合は少し整理してみる必要がある」と述べた。一つのステップファミリーができあがるには必ず前の家族というものが存在し、その中でステップファミリー構成員の各々が喪失、別れ、何らかの傷つきを体験しているのではないかという視点を持ったうえで心理的ケアがなされているといえる。

一方で他の専門職からは、「子どもの症状とステップファミリーを結びつけるということは考えたこともなかった。ステップファミリーは普通の家族と違った問題をもっているとは考えたことがなく、再婚家族と普通の家族から出てくる問題は変わらないと思っている」との発言もあり、専門職間で「ステップファミリー特有の状況」があると考える人とそうでないと考える人とが混在していると思われた。ステップファミリーに対する認識も相談員によって様々であるという現状、また相談員の多くがこれまで「ステップファミリー」を特別意識したことはなかったということ、実際に過去、相談を受けた経験が全体的に少ないという結果が今回のインタビューを通して得られた。

公的相談機関の場合、匿名で電話相談できることや、費用が無料であるなどの特徴からステップファミリーに関する相談もかなり受けているのではと推察していたが、実際にはそれほど多く支援経験はもっていないようであった。今回のインタビューでは、実子がなく継子を育てている初婚の継母からの相談のケースは１件も聞くことがなかった。ステップファミリー当事者組織によって発表されているいくつかの資料や、当事者へのインタビュー結果からの、「初婚継母が最も悩みを抱えている」という実態からは、懸隔する結果といえる。この矛盾点については、当事者が自分達の家族（ステップファミリー）について、何かうまくいかない、生きにくさを抱いていたとして、それを困難に思い相談しようにも、それを伝える言葉や手段が今はまだ存在しないのではないかと考える。言い換えると、ステップファミリーは何を問題視したらいいのか、どのようにそれを専門機関に伝えることができるのかその手立てが、当事者自身もまだ把捉できていないといえるのではないか。DV や虐待について様々な関係諸機関で相談できるようになり、問題解決の道が開かれてきたが、その経緯を鑑みると、社会がそれを「問題」だとして受け入れるよう変化した後に、実際の相談体制が整えられていくという経過を辿るのかもしれない。

もしそうであるならば、今後増えてくると考えられるステップファミリーの相談先として、どのような場所、システムが適切であるのか検討する必要がある。もちろん、ステップファミリーについて正しく認識しているステップファミリー専門の相談場所ができることが最善ではあるが、現存の公的相談機関も、ステップファミリーが相談できる場所として存在しているわけである。インタビューの中でその違いを述べる声が集められたことからもわかるように、公的相談機関といっても家庭児童相談室、児童相談所、女性センター（男女共同参画センター）それぞれに特徴があり、相談内容も支援方法も異なっている。児童相談所が措置、介入権を持って家族に関わるほど事件性、緊急性はない、けれども体を壊すほど子育てに悩み苦しんでいる母親は多く存在している。そういった人たちが気軽に相談できる場所が「家庭児童相談室」という公的機関ならば、現時点では子どもの養育相談が主のようであるが、ステップファミリーの人たちの相談先としても適当だといえるのではないだろうか。ただ、インタビュー発言からも端倪しうるように、相談を受ける側のステップファミリーという存在の認知、認識は様々である現状のままでは、ステップファミリー当事者達が安心して相談できるとは言い難い。ステップファミリーの抱きやすい悩みや葛藤、または家族としてのライフサイクルを正しく知り、適切な情報を伝えることのできる相談員育成もまた今後の課題として必要だといえる。　（桑田道子）

おわりに

今回の調査結果は、あくまで 13 名という少数の対象者へのインタビューからの知見であり、かつその職種も多様であることから、専門職のステップファミリーに対する意識として一般化することはむずかしい。しかし、調査結果は、今後の新しい家族支援のあり方にむけての、さらなる専門職調査の探索的調査として重要な意味をもつものと考える。

第７章　再婚家族当事者支援組織 SAJ の活動経過について

１．LEAVES ペアレンツ・プログラム

SAJ（ステップファミリー・アソシエーション・オブ・ジャパン）の主催する、ステップファミリーの親たちのための対面セルフヘルプグループ LEAVES ペアレンツでは、ステップファミリーの家族関係を作り上げる際に有益な情報提供を行なうことを目的として、SAA（Stepfamily Association of America）の創立者である、Emily & John Visher 夫妻が開発したプログラム『Stepping Together』をもとに、2002 年１月より、３ヶ月ごとに会を開催し、実践を重ねてグループの運営マニュアルを整備してきた。そして 2003 年度は、活動の長期継続を目的としてプログラム・テキストを開発しながら、既に活動を行なっている関東関西の体制強化と開催地域拡大を目指した。

SAA の『Stepping Together』は、特に専門教育を受けたことのない、心理学や家族問題に知識のない人間でもグループワークを主催することができるように作られている。このプログラムが生まれた背景に、専門家が提唱してグループワークを呼びかけるのではなく、全米各地でステップファミリーの当事者が発起人となり SAA 支部を立ち上げ、当事者が参加して相互扶助を行なってきたという事情があったからだ。アメリカでステップファミリーを専門とするカウンセラーはその経験を通し、ステップファミリーに共通する問題を解決するためには、ステップファミリーの生活に関する十分な知識が必要であることに早くから気づいていた。おそらくステップファミリーの３分の１ではより深いカウンセリングが必要だが、殆どのステップファミリーには生活をサポートするための情報やヒントが基本的なニーズとなる。セラピーを受けている 300 近いステップファミリーを対象とした調査研究によれば、セラピーで最も有効だったのは、（１）家族の状況と感情を確認し、それらがノーマルであると気づくこと（孤立感の軽減）、（２）様々な状況に関する情報とその状況を乗り切るためのサポートを得ること（無力感の軽減）、（３）夫婦関係を強化することで、よりよく家族の問題を解決できるようになること、（４）家族のひとりひとりをより理解することと効果的なコミュニケーションを取る方法を知ること、の４点であったことがわかっている。

LEAVES では当初、このような研究を踏まえた上で、SAA の『Stepping Together』を翻訳した後、アメリカ人との生活習慣の違いなどを考慮し、提供する情報の取捨選択や日本人の生活に即した実例を取り入れるなどして、かなりの手を加えた日本向けのプログラムを使用してきた。そして、LEAVES の開催は基本的に３ヶ月に一度と頻繁とは言えないこと、必ずしも参加者の住まいが LEAVES 開催地に近いわけではないことなどを考慮し、どの回に誰が参加しても有意義な会となるよう心を砕いてきた。

しかしながら開催を繰り返すうちに、LEAVES で提供している、それぞれが有益であっても細切れになりかねない情報を、まとめて皆に知らせなければならないとスタッフの誰もが考えるようになった。LEAVES 開催の内容・頻度を見直し、まとめ、出版したものが３回完結の「LEAVES ペアレンツ PROGRAM TEXT」である。内容は、

Chapter1　ステップファミリーの現実を理解する

1　間違った思い込み、ステップファミリー神話

2　初婚家庭とステップファミリーの構造的な相違

3　喪失と変化への対応

Chapter2　家族の気持ちを考える

1　ステップファミリーの発達段階

2　基本的なこころのニーズを理解する

Chapter3　夫婦の絆と子どもの気持ち

1　夫婦の絆の重要性

2　ステップファミリーの子ども

となっている。

LEAVES ペアレンツの開催時間は、1回が2時間45分。自己紹介のあと、本文を参加者が一人ずつ順番に声に出して読み上げる部分と、紙とペンを使って書いたり、それをグループで分かち合ったりするワーク、（図 A）それらのあとのフリートークタイムを組み合わせて構成されており、言葉選び、内容のバランス、時間配分において、これまでの実践から集積された当事者ならではのノウハウが、この一冊に情報化されたと言える。また、このテキストには LEAVES というグループの説明、SAJ との関係を明確に理解できるようになっているほか、参加者全員が自己紹介のために記入する家族カードの書き方（図 B）毎回開催時には全員で音読するグループのルール、タイムテーブルなど、会の運営や進行する側に立って構成されている。グループ活動を長期的に継続していく上で、または、新たな地域で LEAVES の運営をするための土台が作られたと言えるだろう。

2003 年度の活動としては、4月に関東（東京）、関西（大阪）、東北（仙台）、九州（福岡）、7月に九州、11 月に関東、関西、東北、九州、山陰（松江）、1月に山陰で行なった。関東、関西以外の地域での開催に関しては、各地域のスタッフが、関東や関西の LEAVES を訪れ、準備から体験したり、逆に関東、関西のスタッフが地方での開催時にサポートに入るという形でフォローが行なわれた。6月、10 月には、ファシリテーター養成合宿も行ない、2004 年3月には福岡で、今後、地元のスタッフ3名による活動の継続にあたって、関東から2人のスタッフが出向いて、ファシリテーター養成ミーティングが持たれた。また 2004 年4月からは、関東はさいたま市と横浜市に開催地を分けて行われる予定。横浜は、開催責任者が仕事の都合で土日に開催できないことから、平日の開催を試みるなど、今後活動の継続にあたっては様々なスタイルの展開を予定している。

SAJ ではこの1年、LEAVES ペアレンツの活動の他に、次に紹介する継母のためのプログラムを実施しながら、2003 年4月の代表交代に伴う新体制作りが進められていた。会を設立し、活動の方向を模索しながら実践を重ね、基本的なリソース開発に力を注いだ3年半の間には、マスコミにも多く取り上げられ、ステップファミリーという言葉は随分普及してきた。代表であった笠井を中心としたこれまでの組織から、スタッフ全員が大きな輪となって、チャット会議やメーリングリストを中心としたスタッフ間での話し合いの機会を多く持ちながら、長期的に活動を根付かせていくための段階へとシフトしたと思われる。

（笠井裕子・吉本真紀）